

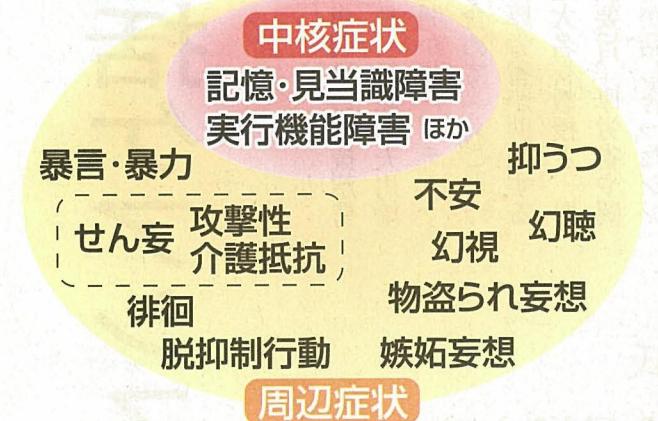
未来を見つめる精神科医療

慈生病院は2012年3月に岡山県認知症疾患医療センターに指定され、主に県の南東部、備前地区の認知症相談や治療に当たっています。岡山市内にはほかに二つの認知症疾患医療センター（岡山大学病院、岡山赤十字病院）があり、認知症の初期診断に重要な役割を果たしています。中でも頭蓋内に血液がたまる慢性硬膜下血腫や、髄液の流れが滞る特発性正常圧水頭症などは、早期に発見すれば治療可能な認知症です。糖尿病や肝硬変による意識障害が認知症と間違われることもあります。

④ 最近の認知症治療のアプローチ—認知症疾患医療センターの役割

慈圭病院副院長 石津 秀樹

認知症の中核症状と周辺症状



認知症専門病棟は10人前後のユニットに分かれ、家族や職員も交えて和やかな雰囲気で食事ができる

認知症には中核症状と周辺症状があります。中核症状（もの忘れなど）の進行を止めることはできませんが、住み慣れた環境で生活するためには、周辺症状（不穏や興奮、徘徊など）を生じさせない工夫をすることが大切です。慈圭病院の認知症疾患医療センターの主な役割は、この周辺症状を治療することです。家庭や施設での介護に影響する周辺症状の悪化時には入院治療を行います。

Aさんは90歳近くまで自宅で単身生活を送っています。

た。高齢になつても車を運転し、買い物やプールに行くななど活発な人でした。徐々にもの忘れが進んで足腰も弱り、栄養失調になつていきました。眠れないのでもうかりつけ医から睡眠薬をもらっていましたが、飲んだことを忘れて薬を重ねて飲むこともあつたようです。興奮して警察や近隣を巻き込んでの混乱状態と、興奮・拒絶の強い状態で入院になりました。

らない生活をしてきたため、ヘルパーや他人が自宅へ入ることを嫌いましたが、病棟スタッフとともに入院先から自宅へ通い、周囲の心配を拭い去り、帰宅願望をかなえることができました。

と言われています。幻覚やうつ症状、せん妄状態（寝ぼけたような状態になる意識障害）などさまざまなる周辺症状がありますが、それぞれに原因があり、心理的な要因を理解しておくことで周辺症状の発症を予防できます。

当院では15年2月の東館開設を機に、二つの病棟（48床×2）を認知症専門病棟として運用を開始しました。全病室のうち80%が個室（トイレ付き）になりました。

超高齢化社会を目前にし、国は「認知症になつてお自分らしく、地域で暮つてこ

が安定すると、われを取り戻すように周辺症状は回復しました。診断は脳梗塞を伴う軽度のアルツハイマー型認知症でした。他人を頼りに生活する状態で、いわゆる勘違いから起ります。元気な夫に対しても役に立たない自分を感じるとが嫉妬妄想に変わりやすい